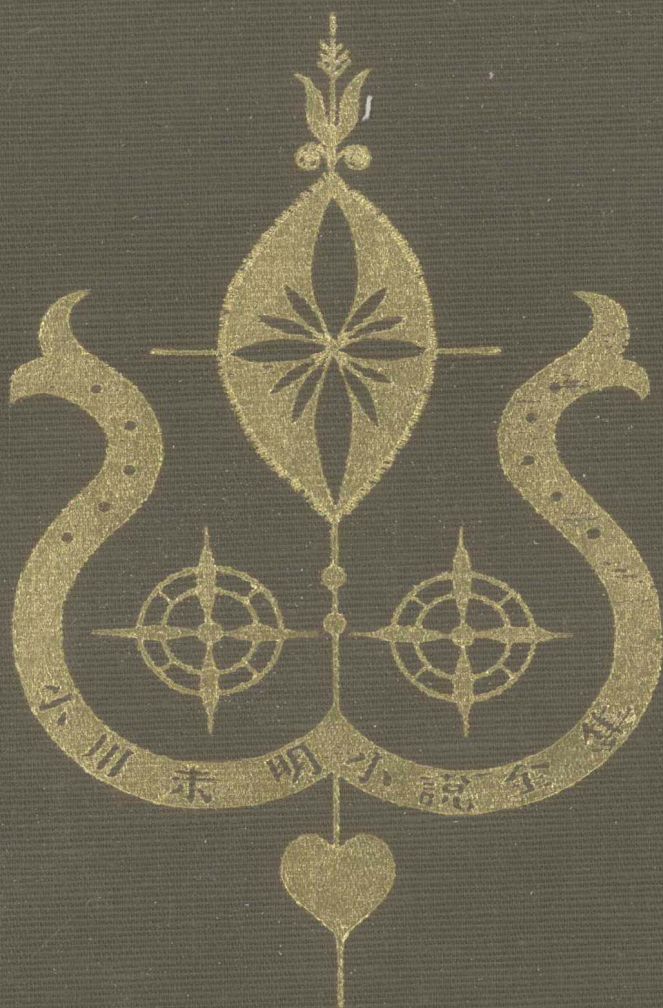






小川未明小説全集

定本 小川未明小説全集 3

小説集 III



昭和54年6月6日 第1刷発行

著者 小川未明

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号 112

電話 東京(03) 945-1111

振替 東京 8-3930

印刷所 廣済堂印刷株式会社

双美印刷株式会社

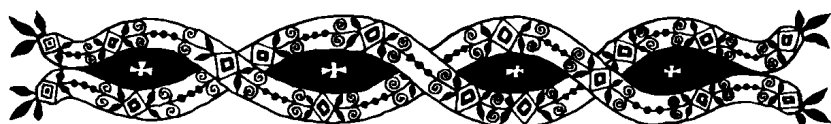
製本所 島田製本株式会社

定価 3500円

©岡上鈴江 1979 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。(見一)

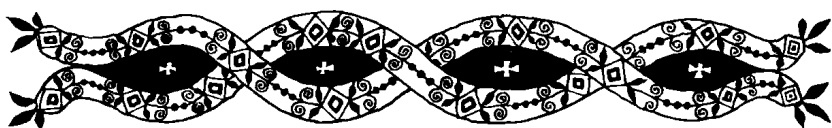
0393-448233-2253 (0)



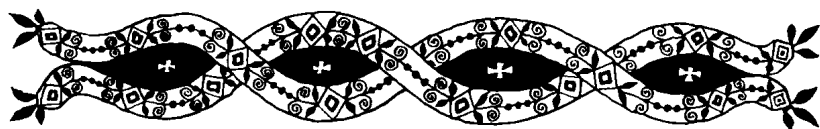
定本 小川未明小説全集 3

小説集 Ⅲ

目次



紫のダリヤ	7
悪戯	46
鮮血	61
生命の綱	77
小作人の死	91
密告漢	116
銀色の冬	131
現在を知らぬ人	141
停車場を歩く男	136
山上の風	144
彼等の話	149
同伴者	154
雪の丘	161
山	170
眼を開けた屍	173



装丁

武井武雄

戦争	186
顔の恐れ	206
河の上の太陽	225
呼吸	255
文明の狂人	275
靴屋の主人	295
無籍者の思ひ出	308
嫉妬	327
死の鎖	354
悪人	372
解説	407
紅野敏郎	

定本 小川未明小説全集 第三卷

小説集
Ⅲ

紫のダリヤ

一

熟^うんだ太陽は、巴^{はたんきやう}旦^{たん}否^{きやう}のやうな色をしてゐた。其の黄色い夢のやうな光りが、兩側の町屋の上に這ひ纏はつてゐる。蒸し暑い、物の腐れるやうな日の風の死んだ午後である。

正助は埃を吸ひながら、其の町を歩いて來た。咽喉は干からびて、眼球が落ち窪んで、襟許から油のやうな汗が滲み出る。言ふべからざる不快な心持と自からの零落を憫れむ哀愁の情と纏れ合つて、聲を立て、此儘地にながみ附いて泣きたくなつた。

彼は病院を出てから、道を何う歩いて來たか思ひ出せなかつた。たえず頭の中には形の定らない妄想や、不安

の濁つた霧が渦を卷いてゐる。しかも眼に見る物の姿までもが、其の暗い色で塗り隠されてしまつたからである。けれど、もう彼の歸る家は此町からは遠くなかつた。

ちやうど、この町の縁日と見えて、其の時分から小間物店や、金魚を賣る露店などが路の傍に出てゐた。植木屋は何處からかいろ／＼の草花や、盆栽を車に積んで來て、横路に引き入れて置いた。白い花、赤い花、黄色の花が細かい葉や、絲のやうな小枝の繁つた間に咲き亂れて、車の上を見るときながら自然の野趣其儘であるやうな氣持がした。

其等の中から、背の高い數種のダリヤが抜き上つてゐた。大輪の紫色の花は夏の落日に照らされて、重々しく首垂^{うんだ}れて、穩かに呼吸をしてゐる如く思はれた。

正助は其處を通る時に、これを見て歩いて來たが、一目見た紫色のダリヤの花がいつまでも眼に映つてゐて取れなかつた。彼はあまり其花の色を好きとは思はないのである。何方かといへば紫が強すぎて、寧ろしつこくて毒々しかつた。けれど、何となく六月の淡々^{あはあは}しい白い柔らかな息の立ち籠めたやうな中に祕密があり、風の吹

くにつけて、折々草木が魔^まされるやうに身に軽く脈打つてゐる不安が感ぜられるかと思へば、其れで活々としてゐて、刻々に萬物の生長する力が目に見えるやうな、しかも一種病的な暗い氣持のする、この季節の自然から眞に産れたやうな花である。

さう思ふせるか、この花が忘れられなかつた。思ふ存分に水分を澤山に含んでゐるやうな太い莖と、黒ずんでゐる大きい厚味のある葉を持つた濃紫のダリヤに六月の魂ひが宿つて吐息してゐるやうに思はれた。而して、妖艶な婦人が黒い面紗^{フェイス}をして立つてゐる姿のやうに、すらりとして麗はしかつた。

嘯^{いりひ}日は庭の喬木の葉にも、草の上にも輝やかしい餘彩を投げた。夏の夕暮方をしみじみと思はせる澄み切つた、紅い西の空の景は、また／＼家根を越えて見えた。而して、彼方の森では蝸^{ひぐらし}が鳴いてゐる。正助は家に歸ると着物を被換へてから縁端に坐つて、つくねんとして暗く考へ込んでゐた。日數を経るにつれて、だん／＼體が衰へて悪い方になつて行く女のことや、先刻見舞ひに行つて見て來た病院のことや、それから自分自身のことなどを思つたのであつた。何もかも其等のものは灰色の霧

の裡に埋もれてゐる。其れをいつまでも忍耐強く見詰めてゐるといふ様子であつた。——この時、紅い空に響き返へるやうな蝸の鳴音を聞くと、すべての思ひから脱け出て、子供の時分の心持が蘇^{よみがへ}返つて來た。眼を擧げて遠くを見ると、あの空の下にも、今も子供の時分に遊んだ、桑園や、森があることが分つた。いつしか故郷の全景があり／＼と紅い空を背景にして描き出された。——しかしこれは瞬間に過ぎなかつた。

彼の子供の時分の幸福の日が、二たび返へらざる怨みがあるやうに、蜃氣樓の如く、鮮かに見えた故郷の景色は、煙の消え去るやうに眼の中からうすれて、既に庭は一面に黒く蔭つて來た。

同時に現實の苦惱はますます／＼重苦しく正助の心を捕へた。

二

彼は、此日の二時少し過ぎ頃であつた、K慈恵病院前の小さな菓子屋に入つて、珈琲^{コヒ}の入らない角砂糖を一斤買った。其店は貧弱であつた。幾日も経つたやうなパンが

曇つた硝子蓋の箱に入つてゐた。この病院へ見舞ひに来る人が、晝飯の代りに買ふ位のものであつたからだ。前齒の外部へ突き出た、四十餘りの女が、

「珈琲の入らないですね。」と注意した。

正助は額際から滴れる汗を拭いてゐたが、

「さうだ。病人にやるのだから、珈琲の入つてゐないのだ。」としつこく念を押した。而して女が箱の中から擲み出す間も、間違ひはせぬかと不安な面持をして、これを見守つてゐたのである。

彼は病院の儼めしい門を入ると、見舞ひに行く者が出入りする口の方へと向つた。雨上り後の炎天で砂地の上が蒸れてゐた。この熱氣を煽り立てゐる處を重い歩調で五六歩ばかり來かゝると、不意に立止つて、今買つて來た角砂糖の袋を開けて、中から一つ取り出して、直接齒で其れを割て見た。彼はやつと安心したらしく、またもとのやうに袋を風呂敷に包んだ。而して、早く妻を見るために大膽に歩き出した。

彼はいつも其處で帽子を脱り、手に持てゐる物を置いてから行く控室に入つた。其處には長方形の腰掛けが窓の下に設けてあつた。圓形のテーブルの上に灰皿が載せ

てある他何の裝飾もなかつた。帽子掛けの釘は三つあつた。彼は其の一つに自分の汗で周圍の濕れた鳥打帽子を脱いでからかけた。而して、がっかりとした氣持でベンチに腰を下した。

しばらく暑い中を歩いて來た疲れを休めるために、ハンケチで汗を拭いた。つい扇子を持て來るのを忘れたので、其の小さな布を顔の前で目まぐるしく手早に揺つて、風を送らうとして見たけれど何の役にも立たなかつた。

今日は、妻の様子がどんなであらうと思つた。一昨日來た時とやはり同じであらうか。たとへ其れより惡くなつてゐることがあつても、萬に一つも好い方に向ひはしなからうといふやうな氣がした。正助はかう思つた直ぐ其の後から、なぜ自分はこんなことを思つたのだらう？ 全く緣起でもない。と其の豫感を心で打ち消しかゝつた。

「何方どちらにしても、直に分ることだ。」と、彼はまた自分の迷信を嘲笑つた。

其の後には茫然びやう然として、廊下を隔て、彼方の窓の硝子を透して、小舎の家根から突き立つてゐる煙突の赤錆びの

出た胴の邊りを見詰てゐた。あまり距離が近過ぎて、其の頂きは見えなかつた。けれど煙の出る時には、鼠色の淡い影がちら／＼と家根の上に落ちるのであつた。今日は煙が出てゐないと見えて、其の小走るうす墨色の影が目止らなかつた。

彼は、こんなことを考へてゐた。

「今度來て下さる時に、また角砂糖を持て來て下さいな。澤山はいりませんから、どうしても牛乳ばかりでは飲み難いのですもの、濟みませんけれど。」と妻が青腫れのした顔を向けて言つたのであつた。

「あゝ持つて來てやる。それに水飴も……。」と彼が答へた。

「水飴は隠して持て來て下さいよ、茶と角砂糖の他は差入れることが出来ない規則なんですから。けれどあまり體が衰へるやうですから。」と妻が歸りかけた正助に言つたのであつた。彼は其時のことを思ひ出した。而して高くなつた懷の上を手で叩いて見た。肌に付けた水飴の罐が隠されてゐる。着物の前の寬いだ間から其れが見えないやうに、きちんと襟を合せて正助は起ち上つた。

其の控室を出て受付所に来て、妻にまで届ける角砂糖

の袋を渡してから、自分は札を受け取つて草履を穿きかへ、上被を着るために白い上被の下つてゐる室に來た。傳染病患者に面會するには、これを着てから行かなければならぬ規定である。上被は傳染病の種類によつて別けてあつた。チフテリー、窒扶斯、猩紅熱、虎列刺、といふやうに病名を書いた木札が壁にかゝつてゐた。後から從いて來た看護婦が「何病患者の方にこ面會ですか。」と聞いた。そこに居る看護婦は行く度毎に變つてゐるので、いつも始めてのやうに問はれたのである。

「窒扶斯です。」と正助は簡短に答へた。

看護婦は直に窒扶斯の札のかゝつてゐる下の上被を取つて被せてくれた。けれど中には背の馬鹿に低い女があつて、容易に釘からはづせ得ないやうなのがある。其時は、正助は自分で取つて被たこともあつた。頭髮の縮れた、赤ら顔の女は正助の上被の釦をかけてゐる間に敏捷に手頸の紐を結んでくれた。

彼は穿き難い草履を爪先にかけて、長い廊下を歩いて行つた。上被を着たために急に體から汗の浸み出るのを覺えた。何の病室も開け放たれてゐた。寢臺の上に横はつて、殆んど枕を並べて一室毎に幾人ともなく患者が青い

顔をして呻^{うめ}いてゐた。何れも幾日かの苦しい疲勞のために肉が落ちて、頬骨が際立つて突立て見えた。眼は暗く骨の中に落込んで、顔の半分は蔭つてゐた。病室の大きは其れぐに異つてゐた。従つて室によつて收容せられてゐる人數の多いと少ないとがある。廊下には各室毎に便器が置いてあつた。たえず消毒するらしく板の上が濕れてゐて、石炭酸の臭ひが鼻を突いて來た。彼は其の濕れた上を踏まなければならなかつた。白い衣物を着た意屈さうな病人の氣味悪い眼付きは其處を通る外來の人間を物珍らしさうに眺めた。これ一つだけでも厭^{いや}惡な感じがせられるのに、汚物罐が置いてあつたり、錆の出た便器の色や、窓際に置いてある赤い昇^{しょう}汞^{こう}水^{すい}の入つた器などが病的に神經を焦立たせずに置かなかつた。庭の方を見ると、其處に人間と無關心に立つてゐる木立の葉には、日の光りが流れて、飴色にてら／＼と光つてゐた。

正助は廊下を歩いてゐるうちに、ふと重く魔^まされるやうな厭な感じがした。其れはまたあのうす氣味の悪い室の前を通らなければならぬかと思つたからである。

其の室といふのは、何か特別の患者を容れるためにあるものゝやうに、極めて陰氣に見える狭い室であつた。

而して、其の室の内の光線は死んでゐるやうに三方は灰色の壁が重苦るしく前へと壓し合つてゐるやうに見えた。其處にはたゞ一人の老人が、大きな寢臺の上に仰向けに臥てゐて、頭を廊下の方に向けてゐた。正助は始めて、妻を見舞ひに來た時から此室の前を通りかゝつて、この老人を見たのである。其れはあまりに其の室が陰氣である上に、また患者が目に見えて寢^{やつ}れてゐたからであつたが、此の印象は惡夢のやうに、家へ歸つた後でも眼から取れなかつた。而して病院へ來るたびに其の室の前を通る時には何うしても忘れることが出來ない、この氣味の悪い室を振り向かなければならぬやうになつた。何うかして、其の室を見ずに行き過ぎてしまはうと思つても、急に其方を向くやうに惹き付ける怖しい力が何處かにあつた。

やがて其の室の前にやつて來た。まだ其の室を見ぬ先きから正助の胸はわく／＼とするので、自然と怖^{おそ}氣が付いて足が進まぬやうな氣がした。彼は前方を見詰めて、脇見をせずに急いで其の室の前を通り越さうとした。けれどやはり駄目であつた。

「あの老人は何うしたらう。」と自分の心の中で問うた

者があるやうに、つい室の中を見たのであつた。

其處には冷たい死の影が宿つてゐる如く、寂然として陰氣であつた。而して灰色の壁が空間を塞ぐために、前へと押し付けてゐるやうだ。老人は日にまし竄れて來た。益と病氣が重るばかりであるらしい全く軀體のやうな顔は尖つて、二つの眼が大きな孔となつて落ち込んで、顎は焦けて、頬骨が土手のやうに突出つてゐた。老人は一日見た時から未だに身動きもしなかつたやうに、やはり頭を廊下の方に向けて、瘦せた手を胸の上に組んで、仰向けになつて其儘の様子で臥てゐる。しかし今日は餘程、苦しみが増して來たと見えて呻き聲が聞える。正助は其の呻き聲を聞くと體に刺されるやうな寒氣を催はした。其れは、もう直に此の老人は死ぬのだといふ考へが頭に浮んだからであつた。

何か不思議な合圖のやうに、正助が其室の前を通る時に老人は胸に組んでゐた瘦せた片手を力なげに上に挙げた。其れがちやうど白い骨が空間で躍るやうに見えた。正助は自分の神經にこの氣味の悪い何等かの合圖が通ずるやうな氣持がして、急いで走るやうに通り返したのであつた。

三

廊下を中途から左に曲つて、少し行つて突き當りの室が、正助の妻のある室であつた。其の室は大きかつた。其處には七八人の患者が收容せられてゐた。彼が其の方に進んで來た時に同じ室にゐる七ツ八ツの女の兒で、屢々行く處から彼の顔を覺えてゐるので、正助の姿を見ると廊下に出て遊んでゐたのが彼の妻に其れと知らせる様子らしく走つて室の中に駆け込んだ。其の兒は殆んど癒りかけてゐて近日退院するといふのであつた。其のことは、この前、何か話のついでに妻から聞いて知つてゐる。

彼は廣々とした、比較的風通しのいい室の前に立つた。室の中に臥てゐる人々は、皆な此方に視線を送つた。彼は直に室の片隅の寢臺に横はつて、やはり此方を見てゐる妻を見付けた。一種のうれしさと悲しきとが胸に混み上げて來た。彼は妻の寢臺の方に歩いて行つた。彼の來たのを見ると臥てゐた妻は少しばかり身を起して迎へるやうな様子をした。

「何うだ。」と正助は彼女の寢臺に近づいた時言つた。

彼方の窓際の處で、先刻見た女の兒は立つてやはり此方を見守つてゐた。其れにこの室にゐる人々の眼や、耳は、すべて此方を注意してゐると思ふと、自から打解けて話すことも出来なかつた。飽迄隔てを付けて置かなければ彼等が直に嘲るであらうといふやうな懸念が正助の心にも、妻の心にもあつた。二人は正面だけでも冷淡に見せなければならなかつた。其れでなくてさへ、この前正助が來た時に、妻から、

「あなたの旦那様はよく見舞ひにいらつしやいますね。」と同じ室にゐる、あの女の人が言つたといふことを聞いたのであつた。そんなことが互ひの心にあるので一層表面だけでも冷淡に見せるやうな考へになつた。

「やはり同じいことです。心臓が悪くなるとかう腫れるもんださうですね。先生はたゞ眠として少しでも動いてはならんとおつしやいますので、今日から小便までかうしてゐてするのです。」と彼女が言つた。青白く蠟のやうに血色のよくない顔が見えた。しかも水氣を含んで堅くなつて表皮が水銀色に光つてゐた。

「起きなくていい。それなら體を動かしてはいけない。

さあ、靜かに臥てゐるが……。」と言つて正助は彼女を舊の様子にさしてやつた。

「牛乳が飲めるか、角砂糖を持つて來たよ。」と彼は言つて、妻の顔を覗き込むやうにした。

ちやうど其時、看護婦が正助の差し入れた角砂糖の袋を持つて入つて來て、彼女の枕許に置いて行つた。

「どうも有難うご座います。」と彼女は小さな聲で言つた。

看護婦が彼方に行つた時分に、彼は懷から水飴の罐を取り出した。其れは新聞紙で包んであつた。

「あゝそれに水飴を持つて來たから。」と言つて、彼は其れを彼女の枕許に置かうとした。すると、

「有難うございます。もう何も食べたありませんから、折角ですけれど持つて歸つて、あなたがお待ち下さい。」と彼女は細い聲で言つた。而して何と心で思つたか急に眼いっぱいに涙ぐんだ。

「だつて、何も食へんでは體が弱るぢやないか。折角持つて來たんだから、此處に置いて行くから、少しでも食べたが……んだよ。」と正助はたとへ言つても無効のこととは知りながら、それでも諭すやうに言つたのである。

「はい。」と彼女は言つたばかりであつた。

かうして暫時二人の話は杜絶^たれた。正助は二たび妻が舊の如き健康の體となつて家に歸るといふことは夢想することすら不可能のやうに絶望を感じると共に心が暗くなつた。而して胸が苦しく塞がつて來た。どうかして氣をまぎらさうと思つて、始めて室の内を見廻はした。

何處かに務めてゐる會社員だとかいふ四十前後の男は、此前に來た時には、いろ／＼傍の人々と話をしてゐて、なか／＼元氣さうに見えたが、今日は餘程様子が變つたと見えて、頭の上に氷囊を當て、黙り込んで枕に付いてゐた。其れと四五日前に入院した雜貨商の年若い女房は、始めて見た時にはこれが眞に病人であらうかと疑はれた程、血色もよく顔付きも何處となく活々としてゐて、大きくばつちりと見開いた、黒味勝の眼は魅するやうに強い印象をこの灰色の室の裡に與へてゐた。而して白い上掛の上に露^あはに出した二本の太い腕は、張り切つてゐるやうに好い色氣に肥えて脂切つてゐた。正助は其の眼の印象や、腕のくつきりと浮ぶ幻を心の鏡に映しながら、其の女の臥てゐる寢臺の方を振向いた。僅か二日ばかりの間に、昔の姿がなくなつた。其れを見ると、今

更ながら病魔の力を怖しく思はずにはゐられなかつた。女の腕は瘦せて、顔の色が青晒^{あせ}めて來て、天井を無心に見詰めてゐる眼には力がなく、落窪んでゐた。女は何か獨言をしてゐるやうに、口を微かに動かしつてゐた。彼は何を言つてゐるのだらうかと思つて、しばらく其の女の方を見守つてゐたのである。すると女は、

「あゝつまらない。」と人に聞えるほどの大きな聲で言つて此方に寢返へりを打つたので、彼は急に眼を轉じてしまつた。

二たび其の眼は窓の方に向いたのである。女の兒は、もはや其處には立つてゐなかつた。この開け放たれた硝子戸のはまつてゐる窓から、病院の庭頭^{にはさき}が見えた。日の當つてゐる木立の葉が輝いてゐる。而して外側の往來と境をした高い板塀が見えた。窓の敷居の上には誰が持つて來たものか、小さな草花を植ゑた鉢が載つてゐなければ水をやる者もなかつたと見えて、既に葉が凋^しれてゐた。此時、妻が物を言つたので、正助は急に其の方を見て、驚いたやうにすべての空想から心を引戻した。

「來ました女中といふのは、どんな女でございますか。」と彼女が問うたのである。